



## 容器包装プラスチック使用量 第二次自主行動計画を推進 2015年に向け40%削減<sup>\*1</sup>の目標(1995年比)を3年連続で達成

<sup>\*1</sup> 製品出荷量あたりのプラスチック使用量(原単位)

日本石鹼洗剤工業会(会長: 濱 逸夫/ライオン株式会社 社長)は、容器包装プラスチック使用量 第二次自主行動計画(主要8製品群<sup>\*2</sup>における容器包装プラスチック使用量を原単位で、2015年までに1995年比40%削減)を推進しており、2013年においても計画を達成しました。当工業会は、容器包装プラスチックの使用量の削減にさらに努力してまいります。

また、1995年から19年間の容器包装プラスチック使用量の推移ならびに、1998年以降の主要界面活性剤の過去16年間の環境モニタリングの結果等は、『環境年報 2014年度版(Vol.39)』にまとめて掲載しています。

<sup>\*2</sup> 主要8製品群: ボディ用洗剤 手洗い用洗剤 シャンプー・リンス 洗濯用液体洗剤  
柔軟仕上げ剤 台所用洗剤 住居用洗剤 漂白剤・かびとり剤

### 【1】製品出荷量あたりの容器包装プラスチック使用量(原単位) 1995年比40%削減を達成

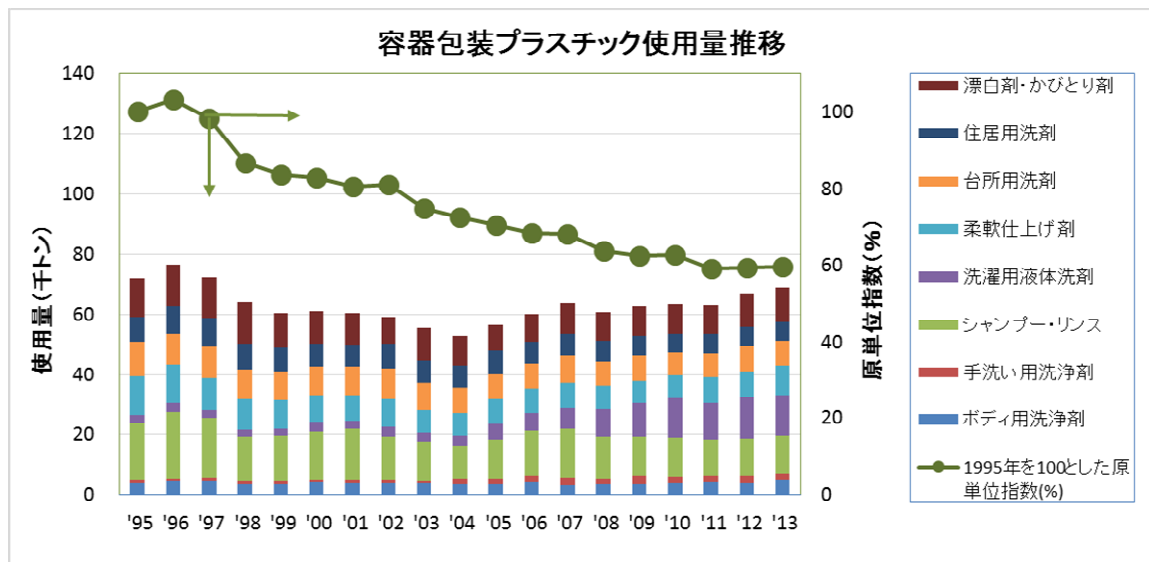
#### <プラスチック使用量削減・取り組みの背景>

2006年6月に改正された「容器包装リサイクル法」では、容器包装廃棄物の排出抑制の促進が盛り込まれるなど、排出量削減(リデュース)の必要性が高まっています。

当工業会は、1995年より容器包装プラスチックの使用量に関して業界全体での実態把握を行うとともに、2011年には「1995年起点で2015年に原単位で40%削減」という第二次自主計画を策定し、会員各社において使用量低減に取り組んできました。

#### <2013年削減実績>

第二次自主行動計画3年目の2013年における対象製品群の容器包装プラスチック使用量は、製品の出荷が前年比2.8%増と推移したのに対し、前年比3.2%増の69.1千トンとなり、主要8製品群の製品出荷量あたりの容器包装プラスチック使用量(原単位)は、1995年比で40%削減となりました。この結果、3年連続で自主計画目標を達成しました(下図)。



### < 第二次自主行動計画の維持継続 >

当工業界では第二次自主行動計画として2011年より、原単位で容器包装プラスチック使用量を1995年比で2015年までに40%削減する目標を立てて活動し、3年目においても40%の削減を達成しました。しかしながらその達成度は初年度・2年目(41%)と比べると若干後退傾向にあり、目標の達成を維持することの難しさも判ってきました。

当工業会では、製品のコンパクト化や詰替え、付け替えの普及をさらに推進し、第二次自主行動計画の目標をコンスタントに達成できるよう、2015年に向け活動していきます。

### < 容器包装プラスチック使用量 削減事例集を公開 >

当工業会では、容器包装プラスチック使用量削減の具体的な事例を会員各社から集め、会員社のみならず業界を超えて参考にさせていただきたいと考えています。12月15日に新たな事例を当工業会のホームページに公開しました。

## [2] 洗剤成分の生態系影響に関する評価結果

当工業会では、洗剤の生態系(環境)への影響に関する調査を1998年から継続的に行なっています。代表的な4種の界面活性剤(LAS、AE、AO、DADMAC)<sup>\*3</sup>について、関東および関西の4河川<sup>\*4</sup>で、年4回の濃度測定による環境モニタリングを実施しています。さらに2012年度からは、柔軟剤基剤としてもちいられている、トリエタノールアミン4級塩(TEAQ)のモニタリングを開始しました。今回は1998年度から2013年度までの過去16年間の測定結果に基づき、生態系リスクについての考察を行い、環境への影響に問題のないレベルであることを確認しました。

- \*3 LAS: 直鎖アルキルベンゼンスルホン酸ナトリウム      AE: ポリオキシエチレンアルキルエーテル  
AO: アルキルジメチルアミンオキシド      DADMAC: ジアルキルジメチルアンモニウムクロリド  
\*4 多摩川、荒川、江戸川、淀川の4河川7ヶ所。家庭排水が流入する可能性が比較的大きいと考えられる代表的な都市周辺河川である。

### < 界面活性剤の環境モニタリング結果と生態系リスク評価 >

LAS、AE、AO、DADMAC及びTEAQの予測無影響濃度(水生生物への影響が表れないと予測される濃度)は、それぞれ270 µg/L、110 µg/L、23 µg/L、94 µg/L及び43 µg/Lであることが既に報告されています。

2013年度の環境モニタリング結果は、1998年度～2012年度と同様に低い濃度を維持しており、それぞれの環境濃度は予測無影響濃度を下回っています(下表)。したがって、調査対象の河川においては、界面活性剤による生態系リスクは小さいと考えられます。これらの界面活性剤の生態系リスク評価については、日本水環境学会<sup>\*5</sup>で、TEAQの河川水中濃度分析法開発については、日本環境化学会<sup>\*6</sup>で発表を行い、当工業会の活動の一部として公表しています。

界面活性剤の環境濃度と予測無影響濃度の対比

項目	LAS	AE	AO	DADMAC	TEAQ
河川水濃度					
2013年度モニタリング結果(最小値～最大値)	nd(<0.1)～21	nd(<0.001)～0.81	nd(<0.01)～0.05	nd(<0.1)	nd(<0.0012)～3.7
調査最大値(98年度～13年度)	81	31	1.9	3.8	3.7
予測無影響濃度	270	110	23	94	43

単位: µg/L、nd: 不検出

\*5 日本石鹼洗剤工業会、家庭用洗浄剤に用いる界面活性剤の河川表層水・底質モニタリングおよび生態系リスク評価、第48回日本水環境学会年会 2014。

\*6 日本石鹼洗剤工業会、河川水中におけるエステル4級塩の微量分析法の開発、第23回環境化学討論会 2014。

日本石鹼洗剤工業会は、製品をお使いいただく皆様にさらなる安心をお届けできるよう、科学的調査・研究活動に今後とも積極的に取り組み、情報の開示に努めてまいります。

以上

お問い合わせ窓口  
日本石鹼洗剤工業会 .03-3271-4301(代表)